

昭和三十八年八月二十五日發行
第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一七二号)

慈光

第十五卷 第八号

次

「教行信証」信樂釈(四)……………近角常観…(1)

近角常音先生お法語謹録……………吉田延世…(12)

目 求道 硯滴(二)……………福島政雄…(17)

心のひかり身のひかり……………木本達縁…(20)

「教行信証」講話

近 角 常 観

『信樂釈』 (三)

さて次は、この恐らくは親鸞聖人がお示し下さる三信釈中のどれにもお示し下さる御言葉であつて、殊にここは最も肝腎の信樂釈のお言葉故、恐らく聖人のほらわたと頂くことではありますが

『然るに無始よりこのかた、一切の群生、^生無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せらせて清淨の信樂無く、法爾として真実の信樂なし』

至心釈にあると同様の御言葉であります。即ちこの信樂は我々初めから信じ喜ほうと思つて、喜ばれる信樂で無い。我々一切の群生海は、無始よりこのかた無明海に流転し、諸有輪に沈迷と、^{つながら}浮きつ沈みつ迷い、衆苦輪に縛り繫れて、即ち私の常に云う五分五分の根性である。この五分々に無始以来久しくはまつて居る人間が、清らかな信樂のところがおこり、人を信じ、仏を喜ぶ心などがあるものか。本来法爾として真実の信樂などがあるものか。そ

んなものは業にしたくも無い。とお示し下さるのであります。

されば次には、
『是を以て無上の功德値遇し難く、最勝の淨信獲得すること難し。』

斯る我々故に、我々の身を一寸斬りに切り開くも、善き処とは一分一厘もなく、我々の心を地獄の底まで堀り尽すも、すこしも信心喜ぶ心などが起るといふ事は無い。この故に我々としては仏の無上の功德に遇う事難く、真実の信心を頂く事が絶対に出来ぬのである。

『一切の凡小、一切時の中、貪愛の心常に能く善心を汚し、瞋憎の心、常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うが如くすれども、^{すべ}衆て雜毒雜修の善と名く。亦虚仮詭偽の行と名く。真実の善と名けざるなり。この虚仮雜毒の善を以て無量光明土に生ぜん欲するは、これかならず

不可也』

我々一切の凡小は、一切二六時中、常に貪欲愛欲の心を起し、善心更に無い者である。偶々少し許りの善き心を起しても、その貪欲愛欲の心が雜るもの故、雪の如き善心も、忽ちその泥の心で穢されて仕舞い、又「瞋憎の心常に能く法財を焼く」我々人と交際上に於いても、人に善き事をした如く思い、人を世話したなど、一かど親切が出来た氣持になり、又仏法上に於いても善根が出来たなど思つて居つても、一寸瞋恚の煩惱がおこり、一念の腹立ちすれば、今迄の親切も善根も一遍に皆焼けて仕舞い、十年の交りも一朝の腹立ちで、忽ち仇敵視するに至るのである。斯く我々のする善は如何に骨折つても、一念瞋憎の炎が燃ゆれば、忽ち焼かれ砕かれて仕舞い、一念貪欲の波が逆立てば、忽ち穢され湿めらされて仕舞うのである。どんな綺麗なものでも、焼けたり湿つて仕舞うては何にもならぬ。

親鸞聖人はまた「正信偈」の中に

「貪愛瞋憎の雲霧、常に真信心の天に覆えり。」
というお言葉もあります。

又「急作急修して頭燃を灸うが如くするも、衆て雜毒雜修の善と名ける。即ちみなこれ雜毒の善にて、色々汚きものゝ雜つて居る善である。如何に全力を尽くして、仏法

者じや理想家だと言つて見た処で、この毒雜りの善ではし

ようが無い。どれだけ善美を尽した食事であつても、砂が雜つて居つては食べられぬのである。我々どれだけ念仏称えるにしても、この雜毒雜修の砂まじりの善では、食べられたものでは無いのであります。

又「虚仮詭偽の行と名く、真実の業と名けざるなり」。我々のする善は、何程一生懸命をやつても、貪瞋、邪偽、^{カクシ}姦詐百端にして、みなこれ「うそ」「偽り」「へつらい」の「ぬりまぶし」の行である。到底、真実の業と名くることは出来ぬのである。

これは先にも申した如く、至心が信樂の体故、至心の真実を言わずしては、信樂を言うことが出来ぬのである。仏の御見捨てなき広大な慈悲の信樂を云うには、至心のまことを離れて云うことは出来ぬのであります。

で斯く我々のする善では、到底真実といふことは言えぬ。故に次には

「この虚仮雜毒の善を以て無量光明土に生ぜん欲するはこれ必ず不可也」

である。この虚仮雜毒の善を以てしては、いつまでやりても、これでは無量光明土に生るることは出来ぬのであります。

さて斯く我々自分でする善では駄目であるが、さればどうすればよいのであるか。そこで次には、
『何を以ての故に、正しく如来菩薩の行を行じたまえる時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋まじわること無きに由つてなり』

である。私より求むるのでなければ、どうするかというに、仏の方より斯く私に善くして下さるによりて、こちらが有難いとなるのである。

その善くして下さるはどうかよくして下さるかと言うに、即ち『正しく如来菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋難ること無きに由つて也』と、こちらは一分一厘人に譲れぬ根性の私であるに、仏は卵の毛の先程も此者を憎いとか、不足だと思召し下さらず、一念の疑いも難えること無しに、私が疑えば疑う程、弥々私を信じ、益々哀れみ下さる広大の御心なのである。

これを世間の上で言つても「彼の人を疑つて居たに、計らんや彼の人にそんなことは無かつた」となる時は、如何にもこちらが申訳なかつたとなる。私はよく、彼の人はこんなことを思っているだろうと思つてると計らんや其人は却つて自分に非常の好意を持つてくれたことが分り、申訳ないことが折り／＼ある。又よく日常生活にある

度をすこしも悪く思わず、一緒に心配してくれて「どうもお気の毒だ」と深く同情の心を寄せて呉れる。この一点自分の潔白を立てようとせず、ひたすら共に心配してくれる向うのまことに遇う時は、その向うのまことのために「ああ申訳ないことを思つた、気の毒な事した」と、たとえ下女に対してでも心の中で頭が下り、あやまる事が出来るのである。

全体、我々が「有難くなりたいたい」、「喜び度い」、「信じたいたい」などというのが、抑々仏を疑つて居るからにて、仏が有るか無いかなど疑つて居るから、斯る心が起つて来るのである。その取つたり、置いたり私の根性を、仏は更に不足とし給わず、その私を飽くまで信じきつて下され
『設い我、仏を得たらんに、十方衆生、至心信樂して我國に生れんと欲うて、乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らず。』

と、呼んで下さる広大のお心と聞くに「さて／＼長々申訳なかつた」と、彼の板敷山の弁円の如くである。弁円が親鸞聖人を仇敵として、聖人を害し奉らうと思つて、板敷山で待ち伏せしたけれど、遂に待ちきれず、庵室に押しかけて、聖人にお目にかかつた。聖人の自分を哀れんで下さる優しきお姿に接するや否や「害心忽ちに消滅して、あまつさえ後悔の涙禁じ難し」……「あゝ長々又向うて申訳な

ことで、私の常に言うことがありますが、我々物を失うた時「置いたものが無くなる筈が無い、これは誰か盗つたんで無いか知らん。外の者が盗るはずがないから、或は下女でも……」などと忽ち心で想像をたくましくするのである。

「然し盗つたところを見もしないでこんな事を思うのはいかぬ」

と、初めは、我と我が心を押えて見る。然しどうも心が落ちつかぬ。「いや盗つたにしても、やつたと思えばよい」と思つて見る。「然しよいはよいが、遭るなら遭るに、盗つたのはをかしい」と、それから、それへと段々に積んで／＼、いろんな思いをしたあとで、ひよつと袖からその物が出て来た時は、どうするか。これはみんながやつておくことに違わぬのであります。斯く充分疑い、疑い抜いた揚句に、その物が袖からひよつと出て来た時には「ああ在つたわい」と自分はすむかなれど、疑われた人にしてはそれでは済まぬ。「盗つた／＼」と長いこと疑い、果ては「結局遣つてよいわい」までにされて、あとでそれが自分の袖から出て来た、実に疑つた人に対しては、申訳無き限りなのであります。

然るに相手は、こちらが充分に疑いに疑いて、充分調べた最後に、何一つ証拠が見つからぬとなりて、こちらの態

つた」と、聖人のまことのために、遂に強剛難化の弁円が氣づかせて頂くに至つたのである。でこちらから信じよう／＼としても、それでは必ず不可である。『何を以ての故に、正しく如来菩薩の行を行じたまえる時、……疑蓋難ること無きに由つてなり』此一点疑いの難ることなき仏の信樂に由つて、有難やと頂かせて貰えるのが信心であります。

次には

『斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る』この一念一刹那も疑うことなく、飽くまでこの私を往生せしめようとの広大の信樂を以て向うて下さるお心は、仏の遺る瀬なき大悲心なるが故に、このお心を頂いた一念は必ず、報土正定の因となる。この遺る瀬なき大悲のお心を頂いた者は、必ず仏のお側に往かせて頂けるのであります。

『如来苦惱の群生海を悲憐したまいて、無碍広大の淨信を以て、諸有海に回施したまえり。是を利他真実の信心と名く。』

仏は一切苦惱の群生海を悲憐し給いて、私の胸の中を、一々御覽下さるのである。仏心は十方法界至らざる隅無

く、小は芥子粒の地に至る迄、広大のお光が至り届いて下されて、如何なる極微の処をも見落さず、必ずその者を救うとのお慈悲故、私の胸中の苦しい／＼をば七重八重、心の底の底まで、広大のお心で照し哀れみ下されて、無碍広大の淨信を以て、あらゆる者の心に、廻施して下さるのである。無碍広大の淨信とは、この仏のお心を頂いた一念は、実に無碍広大で、この仏のお慈悲といい、光明と謂い、その大いなること、無碍なること、人間のはかり得る所に非ざるが故に、天親菩薩は、この仏を、尽十方無碍光如来とお示し下された。その無碍広大なる仏のお慈悲を仏の方より廻施して下され、私のこの有碍の汚ない胸の中に充ち満ちて下された処が信心故、この広大なお心を頂いた処をば利他真実の信心と名ける。又天親菩薩は初めにある如く、これを一心とはこの広大のお心が、煩惱成就の私の胸中に届いて下されて、私の胸中の暗みの破れた処を一心とお教え下されたのである。

『和讃』にのたまわく、

論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことには

煩惱成就のわれらが 他力の信とのべ給う。

尽十方の無碍光は 無明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを かならず滅度にいたらしむ。

実にかく無碍広大のお心より、私の無明の心を知り抜か

り。乃至と言うは多少を撰するの言なり。一念と言うは、信心二心無きが故に、一念と曰う。是を一心と名く。一心は則ち清淨報土の真因なり』

と仰せられてあります。又、

『一念とは斯れ信樂開發の時刻の極促を顯し、廣大難思の慶心を影す。』

との御言葉であります。即ち南無阿弥陀仏の広大なる御本願をお起し下された其の根本の遺る瀬なき大悲の親心を承り、これに無量永劫の夜を明けさせて貰うた信心歡喜の一念をお知らせ下さるのであります。

又次には

『又言わく、他方仏国の所有の衆生、無量寿如来の名号を聞いて、能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せん已上』之は前にも申す『大經』の異訳『如来會』により、上の本願成就の文をお示し下されたのであります。

即ち「他方仏国の所有の衆生、無量寿仏の名号を聞いて」が、上の「聞其名号」であり。「能く一念の淨信を發して歡喜信樂せん」が「信心歡喜」に当るのである。

而してこの「能く一念の淨信を發して」の能くの一字が実に有難いのであります。即ち能くとは仏の願力で、私の心に手易く淨信を起し能う事を顯して下されたのである。

せられ、常にこの私を照しづめにして、遂にこの広大のお心が、私の胸の中に到り届いて下された一念が、一念歡喜の信心であります。

さて次は、茲においてか第十八願成就の文をお挙げ下されて、その広大のお心に届く処をお示し下されて、

『本願信心の願成就の文、經に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、と。已上』

これは、御存知の如く、当流は『御文』の中にも

『信心獲得すというは、第十八の願をこころうる也』

とお示し下されて、この第十八願の広大な親心が、私の心に届いて下され、聞其名号、信心歡喜、と、その遺る瀬無き親心を、私の心に頂く処が、実に骨目である。

淨土真宗はもう唯この聞其名号、信心歡喜のこれ一つ、是れ一つを頂くために皆様もわざわざ、ここで聞き下さるのであります。而してここはもう先日来繰り返しお話すること故、詳しく言うに及ばぬ。『信卷』にはこの御文をお示し下されて、

『經に聞と言うは、衆生仏願の生起本末を聞いて、疑心有ることなし、是を聞と曰う。信心と言うは即ち本願力廻向の信心也。歡喜と言うは、身心悦子をあらわすの貌な

これは詳しく言えば、善導大師「二河白道」の御文に『西岸上に人有つて喚うて言わく、汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん。衆べて水火の難に墮せんことを畏れされ。』

とのお言葉が有つて、能くとは広大なる力で、為し能うこと、為し得る事を意味するのである。即ちここは、仏のお慈悲の力強き、能く私を救い遂げて下さる広大のお慈悲なることをあらわし下されたので、一度言うても聞かず、二度言うても言うことを聞かぬ。遂に駄目だと捨て、仕舞うのなら、救い能わぬのである。処が二度言うて聞かねば三度、三度言うて聞かねば四度、遂に百辺、千辺言うて／＼如何なる強剛難化の者も、遂に助け能うまで、飽くまで辛抱を切らさず、救い遂げて下さるが、救い能うのである。

この「如何なる事があらうと飽くまで見捨つる者でない」との遺る瀬なき仰せが「我れ能く汝を護らん」であります。で親鸞聖人はこの能の字に註釈を施し下されて『愚禿鈔』の中に

『能の言は不堪に対する也。疑心の人也』

と御示し下された。即ち能くの反対は、能わぬのである。堪えぬのである。堪えぬとは、私如きが自分の力で信仰を得て仏に成らんとなると、能くの反対で、堪え

ぬのである。即ちかゝる考えを起すは仏の広大なるお力を疑うて居るからにて、即ち是れ疑心自力の者である。で今我々は斯く、自分如きでは信仰は得られぬなど、仏のお力を疑いて、私の方よりは能わぬ／＼と言つて居るのに、仏の方よりは能う／＼と何処々々々までも、其の者に遺る瀕無きお慈悲を加えて下され、遂にその仏の能うの力で、此方の能わぬのが降参して、その広大のお心が、こちらの心に届いて下され、「有難うございます」となつた処が「能く一念の淨信を發して歡喜愛樂せん」である。「正信偈」の中にはまた、

『能く一念喜愛の心を發せば、
煩惱を断ぜずして涅槃を得。』

凡聖逆誘齊しく廻入して、

衆水の海に入りて一味なるが成し。』

と仰せられてあります。これ又同じく信心歡喜の一念をお知らせ下されたのにて、皆この「能く」の広大のお力より出て来るのであります。

さて次には、斯く『能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を断ぜずして涅槃を得る』故、今度は『涅槃經』の御文をお挙げ下されて

どうもこの辺の調子になると、親鸞聖人が一氣にあなたの心にあるだけを、一遍にどつと言つてお仕舞い下さるようにあるのであります。これは御存じの如く『諸經和讃』の中にも、今この『涅槃經の』御文にある処を皆あげさせられて、皆これ仏の広大なるお慈悲をお示し下さるのであるとお知らせ下されてある。先ず御文に就いて申すならば、初めに、

『善男子、大慈大悲を名けて仏性とす。……是の故に説きて一切衆生悉有仏性と云えるなり。……』
有名なる『涅槃經』の一切衆生悉有仏性の文であります。一切衆生悉有仏性とは、一切衆生は信仰上、皆仏性があるということなのである。

全体この一切衆生悉有仏性の文は、仏学上頗る六つかしきことになつて居るのでありますけれども、一口に言うると、一切の者はどんな者でも仏に成れるという事である。これは原始仏教たると、大乘仏教たるとを問はず、又自力たると他力たるとを問はず、本来仏教とは如何と言え、私の説き置かせ給う法にて凡ての者が仏に成れる、という教が仏教故、総ての者が仏に成れるという処が、一切衆生悉有仏性なのである。

で、抑々釈尊悟り給うや否や、直にアララ、ウツタラの二人の処に趣き、これを度せんとし給うたけれども、二人

『涅槃經』に言わく

善男子、大慈大悲を名けて「仏性」と爲す。何を以ての故に、大慈大悲は常に菩薩に随うこと影の形に随うが如し。一切衆生、畢に定めて當に大慈大悲を得べし。この故に説きて「一切衆生悉有仏性」と云えるなり。大慈大悲を名けて「仏性」と爲す。仏性は名けて「如来」とす。大喜大捨を名けて仏性とす。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は若し二十五有を捨つること能はずば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能わじ。諸々の衆生畢に當に得べきを以ての故に、この故に説きて「一切衆生悉有仏性」と云えるなり。大喜大捨は即ち是れ仏性なり。仏性は即ちこれ如来なり。

仏性は「大信心」と名く。何を以ての故に、信心を以ての故に。菩薩摩訶薩は即ち能く檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足せり。一切衆生畢に定んで當に大信心を得べきが故に、この故に説きて「一切衆生悉有仏性」と云えるなり。大信心は即ちこれ仏性なり、仏性は即ちこれ如来なり。

仏性は「一子地」と名く。何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に。この故に説きて「一切衆生悉有仏性」と云えるなり。一子地は即ち是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり、と。已上』

が在らざりしもの等、去つて鹿野苑なる、当初仏について居つた阿若憍陳如の五比丘の処に趣き、その者などを信仰においれなされた。其時、仏は自ら、この処に六人の阿羅漢が出来たと仰せ給ひてある。これは仏も一人の阿羅漢故、仏を加えて六人とお示し下されたのである。

又次には續いて五人の者を化度して下されて、此の処にはこれにて十一人の阿羅漢が出来たと、斯く仏を一人として、五人で六人、十人で十一人とお説き下さる仏教故、仏教の根本に於いては、仏も矢張り一人の阿羅漢なのである。阿羅漢とは、つまり悟りた人という程の意味にて、斯く仏教は初めから茲が非常に平等に始まつて居るのであります。即ち仏が悟れる如く、仏弟子も悟られ、男も悟られ、

ば女も悟れるというのが仏教の本義なのである。処がそれがあとになり、或者は悟られ、或者は悟られぬとなりて、漸々六つかしくなつて来たもの故、このたび大乘仏教に於いて、一切衆生悉有仏性と説くようになって来たのである。

処がそれが又再び六つかしくなつて、我々衆生は心根において仏性を開見しなくてはならぬとか、或は一切の衆生は仏性が有る、無いなどと六つかしく言うのでありますけれども、何もそんなに六つかしく言うには当らぬ。

其処になると実に此の他力の味いで、他力の上では一切

「悉有仏性とは、どんな者でも仏の廣大なる大慈大悲が頂かれるというのが、一切衆生悉有仏性なのである。斯く言うと大分飛び離れて聞えるけれども、斯く頂くが最も分り易いのであります。即ち「十方衆生」と呼びかけて下さる大慈の廣大なる仰せ故、一切の衆生がその廣大なるお慈悲を有難うと頂く事が出来るから、一切衆生悉有仏性である。仏性とは、其の廣大の仰せにより頂きたる信心が仏性である。とここを斯く早くに読ませて頂くとよいのであります。」

さてここでは、御覽の如く、初めに大慈大悲、次には大喜大捨と、慈悲喜捨の四つが示されてある。この四つが四無量心と言つて、これが菩薩の行いで、菩薩はこの四事を修行したものとなつてあるのである。これは詳しく言へば、慈悲とは与樂で、一切衆生に樂みを与ふるのを慈と言ひ、悲とは拔苦で、衆生の悲しみをとり去るのが悲である。又喜とは人の樂しむを見てこれを誦することなく、共にそれを喜ぶのが喜で、捨とは人に対し、一切怨親の念を捨てて、親疎の別なく平等に哀れみを加うるが捨である。この慈悲喜捨の四つを仏性と名ける、との御文であります。

処でこれは読みようによつて、どうでも読まれる。で昔から茲は色々に読まれてある。先ず「一切衆生は畢に」に

四章の文は、極樂に行くこと得らると書いてあるのでない極樂に往くと得らるとは、我々は信の一念に往生決定故、我々がこの世に於いて信心を頂き念仏称えた時、得らるとなるのである。

で今の『歎異鈔』の文には「念仏申すのみぞ、すえとありたる大慈悲心にて候べきと云々」即ち我々大慈大悲の現るは極樂に於いて現るのであるが、それは極樂に於いて初めて得らるので無い。信の一念に於いて得らるるのなれば、その一念に於いて、未來人を助け、人が救えるこの廣大の大慈大悲を頂きての念仏なれば「念仏申すのみぞ末とありたる大慈悲心にて候べき云々」なのである。

而して其の此世で頂く大慈大悲とは畢竟するに満足大悲円融無碍の信心海なる阿彌陀仏の廣大の大慈大悲を頂くなれば、この菩薩は法蔵菩薩と取るとよいのであります。

又「大慈大悲は名けて仏性と為す。仏性は名けて如来と為す」……これは『諸経和讃』に於いては

如来すなわち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず 安養にいたりてさとりをべし

即ち信の一念に於いて頂いたその大慈大悲の仏性は、未來安養に到りて顯るる、となるのであります。

又次には

大慈大悲を得べきが故に

「大慈大悲を得べきが故に」の言葉を『涅槃經』の当り前の読み方で読む時は、一切の衆生は悉有仏性故、一切衆生はこの慈悲喜捨の働きが出来る、読むのが普通である。ところがここをそう読むといかぬ。『歎異鈔』の四章では、「慈悲に聖道淨土のかわりめあり。聖道の慈悲というものはものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれどもおもひがごとくたすけとぐるごときわめてありがたし。」

我々の心の、何処を押えて大慈大悲の働きがあるなど言うか、そんな心の我々に微塵もないことは、御同よう少し考うればすぐ分る。又次に、

「……また淨土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもひが如く衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにいとおし不便とおもつとも、存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし。しかれば念仏申すのみぞ、すえとありたる大慈悲心にてそらるべきと云云。」

故に大慈大悲の実現は、我々極樂に参りて出て来るのである。故に「一切衆生大慈悲を得べきが故に」とは、我々極樂に生ると得らるるが故にと取る時は、大慈大悲は極樂に於いて得らるることとなる。

処がよく注意してここを御覽になると、この『歎異鈔』

「大喜大捨を名けて仏性と為す、何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、若し二十五有を離るる能わずば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能わず。諸の衆生は畢に當に得べきを以ての故に、是の故に説きて、一切衆生悉有仏性と云えるなり。大喜大捨は則ち是れ仏性なり。仏性は即ちこれ如来なり」

二十五有という諸の迷界を総括すると廿五通りある。故に二十五有というのである。菩薩、摩訶薩は此の大喜大捨の行を以て、この廿五有界を捨てなければ、阿耨多羅三藐三菩提を得ることが叶わぬ。

処が今一切衆生は、この罪惡深重の迷いの者が、仏の長々御苦勞の大喜大捨の恵みを頂くにより、未來二十五有を離れて、仏果に到らせて頂くことが出来る。是の故に一切衆生悉有仏性なのである。又、

「仏性をば大信心と名く。何を以ての故に。信心を以ての故に。菩薩摩訶薩は則ち能く、檀波羅密乃至繫若波羅密を具足せり。一切衆生は畢定して當に大信心を得べきが故に。この故に説いて一切衆生悉有仏性と云えるなり。」

大信心は即是れ仏性なり。仏性は即ち是れ如来なり」

仏性をば大信心と名けるとは、即ち如来廻向の信樂の大信心の事なのである。一切衆生はこの御見捨てなき如来廻

向の信樂の大信心一つを頂くによりて、助かるのである。処が茲でも、今迄六つかしく言うのに係わると、大信心の仏性が我々の心中に無ければならぬなど六つかしくなるのであるが、茲なども、この如来廻向の信心が仏性であるというだけでよい。ここなども菩薩を法蔵菩薩にすると、即ち法蔵菩薩が菩薩の行に於いて、三学六度の行を修し、長々我々の為に苦勞し尽して下された、その広大の御まことによりて、我々一切衆生が頂けるならば、即ち一切衆生悉有仏性であると斯く頂かれるのであります。

『和讃』には、

信心喜ぶその人を 如来とひとしとき給う

大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり。

この信心仏性の『和讃』のお示しは『涅槃經』のこの御文から出て来るのであります。

又、次には

『仏性をば、一子地と名く。何を以ての故に、一子地の因縁を以ての故に、菩薩は則ち一切衆生に於いて、平等心を得たり。一切衆生は畢定して当に一子地を得べきが故に、是の故に説て、一切衆生悉有仏性と云えるなり一子地は即ちこれ仏性なり仏性は即ちこれ如来なり一子地というは一切衆生を一子の如く憐れみ』

ニヤは有かり、きんをばあひの也
得る位である。これは聖人の『和讃』の御左訓には

三カインシユジヤウヲ、ワカヒトリゴトオモフコトヲ

ウルヲキチシゲトイフナリ

とせられてある。なおここで先程より、仏性を即ち如来と云われてある、此の如来は、阿弥陀如来でも善けれども、聖人の御左訓には、

如来トマフスハ、スナハチネハントマフスミユトナリ。ネハントマフスハ、スナハチマコトノホフシントマフス仏性ナリ。シルベシ、コノボンブコノセカイニシテサトラズ候ヘバ、他力ヲタノミマイラセテ、アンラクジヤウドニシテサトル。

とありて、この如来は我々を助け給う阿弥陀仏で申すよりも、此のお慈悲を頂いて、我々が極樂浄土に往生して、如来のさとりを開けて頂く、其の如来の意味にて『諸經和讃』には仰せられてあります。

なおここでついでに、全体親鸞聖人が常に御示し下さるに『証卷』あたりで菩薩のことを仰せられる時には、何時も還相廻向の菩薩のことになし下されてある。

処が又同じ菩薩のことを『論註』『二門偈』などに於いては、法蔵菩薩の事になされてある。どうもすこしおかしきようであるも、能く頂くとこれでよいのであります。何

故かというに、我々極樂に往くと、衆生済度の出来る菩薩のさとりをあらわさせて頂くのである。

処が阿弥陀如来の法蔵菩薩は何処から現れ下されしかというに、矢張り極樂の一如法界より、我々を助くるために姿を現して下されたのである。して其の御姿で我々を極樂の真如法性の境に到らしめ給うので、即ち我々の極樂に往くは法性法身の境をさとらせて頂くのである。して其の境より姿を現し下されしが、法蔵菩薩と、即ち同じことなるのである。

併しながら極樂の真如法性の身では、我々手が届かぬは信仰の対象にはならぬ。そこで其の境より姿を現して法蔵菩薩と示し、長々の御修行により正覺を成じて阿弥陀仏となり、我々を極樂にお救い下さるとなるのである。

でこの広大の御哀れみにより、我々が極樂に往き、衆生

を一子の如く平等に哀れみ得る身となして頂けるのであるが故に、一子地である。

一切衆生は広大の仏力により、未來極樂に於いて、其一子地を得べき身となして頂けるが故に「其の故に説いて、一切衆生悉有仏性と云う也云々」となるのであります。又『和讃』には、

平等心をうるべきを、一子地となづけたり、

一子地は仏性なり、安養にいたりてさとりべし。要するに、広大のお慈悲により、我々極樂に往生させて頂けば、大慈大悲を現し、衆生を一子の如く憐れむ身として頂けるのである。長くなりませぬ故、これで切りと致します。

(夏季求道会第五日第一席)

「近角常音先生御法語」謹録

吉 田 延 世

人生、生死流転の有様、浮沈あり、禍福あることあざなえる繩の如し。失敗あり成功あり纏綿すれど、真心徹到の

信仰のみ終始一貫、金剛不壞なり。

「悪をも恐るべからず」ということは、日光をつめたくしてしまふ氷なきにより、氷の心なることを気にするな、冷たいおのれの心を気にするなということである。出離の縁のない、地獄必定の身なるをあきれず、悪しきことを気にするなどの仰せに頭を下げて真心徹倒するのである。

この身のすべてのことが碎けてしまわなければ信仰心が起らぬとか、念仏が称えられんとか、何とかなるとか、喜ばれるようになりたいとか、なんとかかんとか、このようなことが色々と思われるのは、何か心に残っている証拠である。如来より見れば絶対絶命である。

そのためにつぶれて行くのを見て、あわれと思召し、見捨てぬお慈悲である。

『我よく汝を護らん、水火の難に墮せんことを畏れざれ』と。

一代貧乏で思うようにならず、あたりの者も皆自分より離れて行つても、たといどうなるうとも、どこどこまでも護つて下さる。将来の先の先までも看護みもまつて下さる御慈悲

たいと思つた。

自分のことは自分でわからぬ。やけくそになつているものをあけくれ心にかけて心配している方があるのをありがたいと思つた。これが思いがけぬありがたいことで、広大なお慈悲である。絶対絶命のものに対してあけくれ見まもつて下さる親心である。

何時までたつてもわからぬ、徹底しない。それだからわかるまでやろうと思うことが我慢のやまん証拠である。何事も徹底しないが何時か何とかなるもののように思つている。これが我慢のやまんということである。

人間はいくら危篤におちいつても、死ぬとは、死ぬが死ぬまで思わぬ。なんとかたすかと思つている。これが我慢のやまんことである。

これだから流転する。自力根性でお慈悲をきくものだから、これは他力でない。かくして墮落して行く。かかる者を見すてぬ五劫兆載の御苦勞がある。

郷里に地藏橋があるが、そこを渡る人はみな地藏菩薩さまの頭を踏んでゆく。地藏さまは頭をふまれ／＼て、それを悪く思わず人々を渡して下さる。これが思いがけない親

である。

この御真実のおまことにほだされて、南無阿彌陀仏の一生を終りうるのである。

生死の苦海の重荷は仏が荷負うて下さる。これ生死解脱の利他・他利の大信大行の賜物である。如来の御真実ばかりで生死の苦海を渡りうるのである。

他利は衆生の立場からいう仏の救いである。利他は仏の立場から衆生を利することである。

ああこのうのと死ぬまでよしあしをばかりいうても、明日をも知れぬこの身である。一つも間に合うものはない。このように碎ける身を、利他の御真実をもつて御同情して助けて下さる御まことである。これ一つで世間を渡らしてもらうのである。

自分の心のよしあしを気にしては、何時までたつてもわからない。

兄貴が「あいつの我慢のやまんのが可哀想である」と、人に愚痴をこぼしたことを嫂あかからきき、あけくれ私のことと思いつめている親心を知つて、仏の心の難思議をありが

心である。

よければよいとほめ、あしければあしと斥けるこの世に、それにかまけず、お見すてないお方、これが仏の清淨真実である。

いかなる大罪を犯しても、かくならねばならぬ業報であるを憐み、いかに失敗しても、それにつけて見すてぬ仏の親心である。

世界の乱問題、家庭問題……それをああこうといかほど改めても依然として、かくの如き世の中である。一人一人が仏の御真実に遇い奉ると何事もまかせられる。逆境非境はいかに嫌でも、如何に崩れ来ても、お見捨てないお慈悲である。

いかにひどい目にあい排斥されても、それが自分の業であると思ひ返し、その人を悪く思わずよくしてとつとめていても、それが何時までも続かないのが現実である。

死ぬが死ぬまでつとめても、自分の思うところに運ばれん。このところをあきらめねばならぬが、なかなかここが諦められない。容易にそんな心になれない。遂に互に恨み、反抗し、やけになるのが落ちである。これ

が現世の姿である。

○ ここをもつて、私は大願をおこし、無上の法を説く、希有難信の法を説かれるので、世間にかかる希有のことはあるものではない。

○ わからぬ／＼という人は、わかる能力のある、わかる楽しみのある人のいう言葉である。

○ この人生はやけになるか、自殺するか、結局行詰る外のない人生である。それについてもお見捨てない御慈悲で希望をつながれて、この世の宿業をはたすのが仏願力のお蔭である。

○ 世界はみな、よしあしということのみ申しあひ、戦い争うのである。

て、有難く思ひ、一層深く聞くようになった。

○ 人生問題に行き詰つて、それで仏に帰依して、力強く生きて行こう、人格を高くしよう、折合よくして行こうと思ふことは、またかかることを予期することは、勿論一通りならぬ志であるけれど、結局失望落胆する。わが身の問題になつていないのである。

○ かかる人は皆自分のことを忘れている人である。人生に方法はない、如来の慈悲を頂くばかりである。如来のおはからいにより方法は生れることである。

○ いくらお金をやつても、放蕩息子はつかいはたして空虚になる。いくらお金をやつてもそれでは救われぬ。その身ぐるみ引き受けて下さるのだ。そのような親はこの世にはない、仏の御慈悲ばかりである。

よしあしということは、皆自分でよしと思うことを出来ると思ひ、又悪くともよいと思ふは、いつでもやめられると思つているところから、よしあしをやかましく言うのである。

○ このよしあしばかりで、そればかりのこの娑婆で、ただ一つまことがある。それは念仏である。絶対不二の御眞実の念仏である。

○ この絶対の慈悲の中にあつて安心しているわけであるから、身はどうなろうと、捨身求道と精進することが出来るのである。

○ 前田老人は、一代念仏で明けくれたが、震災で妻を亡くし、家を焼かれ、先日また会館にお詣りしようとして、電車でひかれて大怪我をして入院したが、念仏してもちつともよいことがないと思ふも出るが、その愚痴の出るにつけて、そこばくの業を持ちける身にありけるを知られ

山崎 哲三氏 遺詠

わがためにわれいまここにとよびたもう
御名のみまえになみだぬくわん

たえまなき炎にくるうわがうえに
たまいる御名ぞ うけまつらなむ

死ぬべしとおもいさためて詠みはじむ
うたも妄執 あわれ人の子

求道硯師 漸 (一)

— 二つの教訓 —

福 島 政 雄

もはや三十年に近い以前のことであるが、私が大谷大学に講義していた頃、曾我量深師から三つの教訓をうけた。その二つが殊に感銘深かつた。曾我師は教員室で師と私と二人きりいた時に自然に話し出されたことなので、私は特に身に染みて感じている。

その一つは清沢満之先生のことである。先生がよく言われたこととして曾我師はお話しになつた。

「皆自分を理智の人と思つていようだが、自分は実に感情にもろいので、つとめて理智を養うように心掛けてい

る。」

これが清沢先生の言葉であつたと曾我師は語られた。これを聞いて私は深く考えさせられた。私自身も、先生の書かれたものを読んで先生を理智の人のように感じていた。先生が常に机上に置かれて読まれた本は、歎異抄とエピクテトスと阿含経とであつたという。そのエピクテトス

は理智の人であつて、その教訓はいわゆるストア哲学の純なるものである。先生は「戸は常に開かれてある」というエピクテトスの語を引いていられる。死に対して冷徹の悟りを開いていられるように感ずる。然るに此の先生が感情にもろいと告白せられる。私はここに人間というものを深く考えさせられる。

大哲カントの哲学は非常に理智的であるが、そのカント自身はやはり感情にもろい人であつたようである。カントは親しい友人などが危篤の病状である間は、その病状を委しく聞いたのであるが、その死去をきくと、それつきりその友人のことを話さなかつたという。これは甚だ無情のようであるが、感情の強いカントとしては死んだ友人のことを話し得ないほど情がせまつていたのであろう。

これによつて清沢先生のことを考え、また自分のことを考える。感情の極致は無感情のように見える。理智的のこ

とをしきりに説く人は、堪えられぬ自分の感情を支配するためであるかも知れない。私自身のことを言えば、私の小学時代に担任して下さつた先生が「福島などは悲しいことがあつても人の前でそれを現さず、独りになつてからしむじみと泣くような人間だ」と言われたことを思い出す。

私はエピクテトスの教訓よりもマルクス・アウレリウス帝の自省録の方に親しんだものであるが、それはアウレリウスの方が温情があるからであり、私自身の心の冷たさがそこにあるのかも知れない。小学の先生の言葉はどんな意味であるか、考えさせられる。どうも清沢先生と反対の性格であるかも知れない。

それで私は無限の仏のお慈悲ということに先ず打たれた。冷たい私の心に無限の温かさが先ず染み込んだのである。清沢先生のお書きになつたものを一応拝読すると、非常にはつきりと問題が解決せられて、私が自分に無いものを求める心が満足せられないように感ずる。併しそれは先生の深いお心持までに徹しない、浅薄な私ゆえであらうと思ふ。

曾我師の第二の教訓は次のようである。

「自分が若し六十才以前に死んだならば、お聖教は全くわからずにすんだと思ふ。七十歳を超えてからお聖教に心を入れて少しわかるようになった。六十歳以前の自

分はお聖教の言葉を自分勝手に使つていたに過ぎない」

これは実に私にとつては深いお誠め言葉である。三十台の私は、近角先生のお導きで立派な信仰を得ているという慢心を持ち、その信仰によつて教育学をも説いているのであるから、自分の教育学は独特のものであるという傲慢な心で一ぱいであつた。或る人は此の私の慢心をひどく怒つたこともあつた。しかも私は反省もせず、独り善がりも続けた。そして仏教のお話となれば自分の煩惱の話ばかりをしてきた。併し心の中では実は大変淋しかつた。始終人を求める心が止まなかつた。

曾我師は七十歳を超えてから少しはお聖教に身を入れてその真意に触れるようになったと言われた。それは師が七十三歳の頃であつたと記憶する。実に尊いことである。それに引きかえ、私は何をしていたのであろう。若い時からペスタロツチ、プラトン、ソクラテス、聖徳太子、親鸞聖人と経めぐつてはいるが、そのいずれにも徹してはいない。

それぞれのお蔭を蒙つてはいるが、七十歳を超えてその一人にも徹していかないことを感ずる。聖哲の教を自分勝手に受けているというだけのことである。或る一つの教に七十歳以後すつかり打込んでいられるということが無い。「一芸の士は皆語るべし」と言われるが、私にはその一芸が無い。云わば雑学の徒というものである。

併し中心問題として、さすがに祖聖親鸞の御教から離れているとは言えない。お念仏はほそほそと続いているお念仏であるが、それだけは真実である。近角常観先生の口まねをするようであるが

「福島は嘘ばかりの人間であるが、仏の眞実心を受け
ているお念仏は眞実である」

と言いたい。そのお念仏によつて私がどれほど立派な人間になつているかと言へば、少しも立派にはなつていない。私の悪い性質が今なお変つていないことを折に触れて感ずる。ふりかえつて見れば、七十余年の私は實際過失や犯した罪が一ぱいにあることを感ずっている。

此のような私であるから今こそお聖教に身を入れねばならぬのであるが、それも出来ない。雑事に追われそのひまひまに雑書を書き読みしている。ただ有り難いことには同じ書物を読んでも、若い時よりもしみじみとした感に打たれる。論語を読んでもその味わいが深くなつていくことは事實である。尤も私は「論語読みの論語知らず」であるかも知れない。併し深く感ずることは事實である。ただ此のような有様で、「いかなる不思議のことにもあい、念仏申さずして終る」という歎異抄のお言葉のとおりになるかも知れない。それは私にはわからぬ。ただ仏のみがしろしめすことである。
(昭和三十八年七月二十日、稿)

心のひかり身のひかり

(註) 木本師は少年期から真剣な求道を続けて来られました。大戦後は居を大阪の地に定められ、現在は東住吉区駒川町一ノ八六、徳染寺を創設、法灯を地に掲げて居られます。本稿は師が月々、洋紙一枚にプリントされて、有縁の人々への宗教の家庭回覧紙とされたものから頂きました。聚塵生。

心のふるさと たましいの家

仏壇は安置してあるけれども、先祖から伝えられた家庭の宗教はあるけれども「私は斯く信じております。私は斯く救われた日々を送っております」とはつきりいえる人になかつたら、その人は無宗教であり無信心の人であります。

又、こんな人がいます。「どんな宗教でも何を信心しても一しよじや」と、よいかげんな気持で人まねをしておる人がある。こんな人は盲信といつて、宗教的には無知であり盲目であつてほめたすがたではありません。宗教の中に

良寛詩 (一)

善をなす者は升進し 悪をなす者は沈淪す
升沈つとに待つあり 因循ときを過すなかれ
苦しい哉 後來の子 愚の富み、賢の貧なるを見て、
善惡の報無しとおもうは 此はこれ極痴の人のみ
因果に三世あり 影のその身に隨うが如し
ただ業の重軽をおうて 遲速の報ひとしからず
君にすすむ能く信受して 外道の倫を学ぶなかれ

良寛詩 (二)

夫れ人の世にあるは 草木の高低不同なる如し
共に一種の見に執して 到る処たがいには是非
我に似れば非も是となし我に異なれば是も非となす
唯己の是とする所を是とし何ぞ他の非とする所なるを知らん
是非は始より己に因る 道はもとより斯の如くならず
竿を以て海底を極めんとす たださとる一場の痴たることと

木本達縁

は純金にみせかけていても、それがめつきしたいかかわしいものが、雨後の筍ほど沢山ありますから、それを批判し弁別する識見を養わねばなりません。

つまりもつと宗教を大切に思つて勉強する事です。真面目に自分をふりかえつてみましょう。自分は無宗教者か、或はにせ信者か、又はざつぱ信心者であろうか？ 宗教とは、むねのおしえという事であつて心のふるさとであり、たましいの安住所であります。正しい宗教を持たぬ人は心のふる里をもたぬ人であり、たましいの家をもたぬ人です。どんなに物質的には豪華な家に住み、せいたくな日暮しをしていても、心の家を持たぬ淋しい人であり、お気の毒な人であります。

南無阿弥陀仏は心の家であり、たましいの安住所であります。たとえば母に抱かれた子供は何物にもかえ難い力強さと安心感にいきてるように、南無阿弥陀仏は心の親で

あり、たましいの慈母であります。「如来の大悲にいたかれてやすらかに日をおくる」淋しい、悲しい、はかない人生、なやみ多き生涯を南無阿弥陀仏にはげまされ、引き立てられ、又慰められて強く明るいきぬく力となつて下さるものが宗教であり信心であります。僧侶はお経を讀んで亡者のおもりの役目ではなく、亡き人を御縁として生きた人々に心の目を開かせ、心の家を与え、真実永遠の幸福を感じ人生に最も生きがいを持たしめる事である。陰氣な墓場が南無阿弥陀仏ではなく、陰氣な墓場を照らす光が、南無阿弥陀仏である。

「ひかりといのち きわみななき
阿弥陀ほとけを あおがなん」

—一〇〇号—

不滅の遺産

「ひそかにおもんみれば、人身うけがたく、仏教あいがたし。しかるにいま片州なれども人身をうけ、未代なれども仏教にあえり。生死をはなれて仏果にいたらんこといままさしくこれときなり。このたびつとめずしてもし三途さんず(まよいとくるしみ)のせかいにかえりなば、まことに宝の山に入りて手をむなしくしてかえらんがごと

手中の玉に氣つかずして徒らにフリキヤナマリを追うておることは悲しいことであります。

(註)……経に、衣裏宝珠えりほうじゆの譬たとへが説かれてあります。それは親が死に臨んで子や孫を集め、「人生には幾山河越えて行かねばならぬが、若し本当に行き詰つた時はこの箱を開け」と遺言して亡くなりました。其後天災やら病氣やらで不幸が続きおちぶれきつた時、その箱を開いて見ると、中には一枚のポロの服が一枚あるだけでした。そこでいよいよおちぶれたらこのポロ服を着て乞食をせよということだと思ひ毎日村々街々を乞食して歩いて居りますと、親の無二の友人であつた老翁にめぐり会いました。するとその翁は驚いて「この服の裏に宝石が縫いこまれている。私はそのことをあなたのお父さんから聞いていた……」と云つて、服をしらべると、沢山な宝石が出たので、親の真意がはじめて知れて、自分の愚さをわびながら立派にたちなおることが出来ました。

人間作りを慎重に

薄弱なる温室育ちの花ではなく、意志強固しつこかりとした独立性を養つて行きましよう。

雨の日もあり風の日もある人間生活を顔をしかめて暗い

し。なかんずくに無常のかなしみはまなこのまえにみてり。ひとりとしてたれかのがるべき。三悪の火坑かきう(まよいの火のあな)はあしのしたにあり。仏法を行ぜずはいかでかまぬがれん。みなひとところをおなじくして、ねんごろに仏道をもとむべし」——存覚上人の法語——

これは私の少年時代から暗誦そとよみしてしみみと人生というものを感じしめられた懐しいお言葉であります。

どんなに意味の深い黄金おうごんのような言葉であつても、いつの間にか年月の経つうちには忘れられたり、おろそかになるのが人間のつねであります。ところが五十をこえた今日改めてこのおことばをとりだし、襟を正して拝読いたしますと、なんとも言えない魂のひびきを感じ胸をうたれる思いがいたします。

「心ここにあらざれば見れども見えす、聞けども聞こえず食えどもその味を知らず」

と昔から申しますが、尊い黄金の言葉を与えられながら、「耳なれ雀」になつて、うわのそらになつて行き勝なことはまことに悲しいことでもあります。

仏法はよそに求めることではなく、向うにさがすことではなく、手中てのなかの玉にめざめることであり、与えられている大きな仕合せに驚くことであります。宝の山に入りながら

日暮しにするも、ニツコリ笑つて明るい人生にするも、一つの置きどころである。そうした不動堅固な心の置きどころを作るこそ人間作りの根本基礎もとたもとであり、それは絶対の宗教によつてこそ満足されるものである。

下劣な御利益主義、功利主義に陥り、欲な心と信心とをテンピンに掛けてのぼせておるような宗教は、動物界へ墮落しているみにくいすがたである。狂信的迷信きやうてきしんに迷わず、正しい信心に生きましよう。

真の人間づくりは外(他)に向つていう言葉ではなく内に向つて各自が自己自身にめざめる事から出発せねばならない。釈尊は『汝自身に目ざめよ』と仰せられています。仏陀とは自覚(自ら覚め)、覚他(他を覚めしめる)の智慧と力用が円満(かけめなく)にそなわつたおかたをいふのです。

さて自己を反省し自己にめざめてほんとうの人間になるという事は、これほどむづかしいことはない。千万の敵に向う勇者でも自分自身の心の賊を制服することは至難である。現に創価学会は他に向つて折伏攻撃しゃつくくをしておるが、内なる自己を見る目はずぶれておる。他宗をそしつたり無茶でも信者を獲ろうとしておる悪魔さながらの自己に目がさめたら恐ろしくなつて戦慄するであろう。

真の人間づくりの道は仏陀のお光明ひかりに遇うことである。

お光明にあうと自己が知らされる。自己が知らされると頭がさがる——御恩が見えてくるし生かされている喜びがわいてくる——そこに感謝の両手のあわせる人格の重味が形成されてくる。……「松蔭の暗きは月のひかりかな」……

——一〇九号——

合掌

布施を受ける資格

——わが身をかえりみて——

身に法衣をつけ、手に珠数をかけて、朝の礼拝の時に私は今日一日の勤務精神と、その態度を定めるのである。人それぞれ勤めを持ち職場々々に励んでいる。ラッシュアワーの電車やバスにもまれて出勤する姿を見、めまぐるしい機械と取りくむ姿、海に陸に、野に山にせつせと働く人の姿を見ると尊いものを感じ拝む心になる。かくて人々は今日一日働くことによつて何物かの効果をあげている。

さて私は、僧侶として今日一日、何を為し、何を成し遂げんとしているか。深く自分をかえりみなければならぬ。

私は精神的勤務者であるという自覚をもつて毎日の法務に従事することである。「み仏の誓いを信じ尊いみ名を称えつつ」——この精神の上から自行化他を行する姿こそ、

私の勤務対度でなくてはならぬ。精神のぬけた読経、弁論だけの布教で世を渡すことは、甚だ職務怠慢であり、また偽善者であつて、酷評すれば、居眠り運転や、スピード違反者と同じことではなからうか。大いに叩頭懺悔せねばならぬ。

たとえ深い信仰はなくとも、命日に心をかけて花等をお供えして、僧の読経を期待し、敬虔に布施する姿の上に、尊く美しいものを感じる。これを粗末にしてはならない。この姿を縁としてそこに働きかけてゆく心がなくてはならぬ。ともすれば僧侶としての根本精神がうとんじられ何等精進する気持ちもなく、只その日暮しに明け暮れして、布施のために経を読むいたまじき餓鬼の生活に落ちんとする自分を、厳しく責めねばならぬ。私のどこに平気で布施を受けるだけの資格があるたらうか。誠に慚愧せねばならぬ。教学を深めてゆくことも、また伝道方法を修練することも大切であるが、私は最も大事なことは、僧侶としての基本精神と基本態度を養い、今直ちにそれを実践することであると思う。この生命の抜けた者に、何の教学ぞ、何の伝道ぞ、と云いたい。罪の身に仏を拜ませて頂き、罪の口にお経を読ませて頂く、何という尊い、何んという生きがいある生活であらうか。

お経を読む姿のままが自行であると共に、また化他之行

となる。無関心な家族の身の上にもしみこみ、仏縁結ばれ

かしという願いをこめて、恭しくお経のよめる僧にならねばならぬ。必ずお経をほぐよみしてはならぬ。厳しく叱責

して常に自己をたしなまねばならぬ。お経というものの真精神をすこしも味得せず、唯音楽的にそら読みして、全く

無刺激に陥つていくということが、民衆から捨てられて死者の慰め道具に扱われる原因であると思う。仏心とも通わ

ず、民衆とも通わず、形式読経の中にどこに生きた仏教のはたらきと、現代的意義があるであらうか。私は旧に偏せ

ず、新に走らず、新旧折衷し、機に応じて実感のともなう法要儀式を行いたいと心がけている。

中外紙発表。昭和卅八年五月廿九日。

伝教大師

明らけくのちの仏の御代までも　ひかり伝えよ法のともしび

弘法大師

雲はれて後の光と思うなよ　もとより空にありあけの月

源信僧都

さとりえて思いとく日にあいぬれば　ほどなく消えぬ罪のあわ雪

法然上人

月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人のこころにぞすむ

良寛和尚

かたみとて何かのこさん　春は花　夏ほととぎす　秋はもみじ葉

行誡上人

鶯のやま高ねにのみとききしかど　わが軒端にもありあけの月



あとがき

本年は近角常音先生の満十年忌になりました。年こそ違いますが広島原爆の日と先生の御忌日が一致して居りますので、ふたつのごとが重なって想い出されます。終戦後の秋御

郷里のお寺での報恩講の日、

「風雨のひどい夜は、戦没者の叫びが遠くからきこえるように感ずる。」

とポツリと迷懐されたところ^とが想い浮びま

す。「仏法ひろまれ、国家安かれ」と祈念し続けられて、すでに心臓の衰弱された御老体をもたれながらも夜更けまで心を深くお配り下さった御姿がありありと眼底に刻まれて居ります。

九州の吉田延世さんが、かつて東京に居ら

れた時求道会館で、常音先生と常観先生のお

二人でお話し下さったことを、断片的ながら

記録していられました。その散失をおそれて

書写せられたものを数年前に頂いて居りま

したが、その中から常音先生の御法語を抜

書きさせて頂いて満十年の今月、皆様と共に

法雨を蒙りたいと願って記載いたしました。

文責は総て編者にあります。

福島先生から「求道視滴」を御恵み下さい

ました。「道を求めてやむことなき」御晩年

の御信味に触れ、省みさせられますことばか

りであります。

木本達縁さんは、「生き馬の目を抜く」と

昔から伝えられます大坂の地に留まつて、有

縁の方々と日々夜々求道の旅を続けて下さる

ことに畏敬申して居ります。

御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半、真宗講座。但し第一日曜は歎異抄の話。

於一道会館

毎月廿四日午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会

定価一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番